

# 新歴史の見える風景

逸見昌経と高浜城

大飯郡高浜町事代

若狭の大族逸見氏の興亡

逸見氏は、若狭国守護である武田氏を支えた有力家臣で、若狭西端の高浜を拠点に、隣国丹後に対する防備を担った。特に水軍を軍事力の要とし、若狭湾の海上防衛において極めて重要な役割を果たしていた。

しかし戦国時代後期、主家武田氏で内紛が続発すると、時の当主逸見昌経もこれに深く関与した。弘治2(1556)年の武田信豊と子息義統の争いでは信豊側についたが、義統には越前朝倉氏が加勢し、その結果、家臣団の分裂と主家離れが進んだ。

永禄4(1561)年、昌経はついに武田・朝倉方に対して反乱を起こす。昌経は同じく重臣の栗屋氏や丹後方面の連合軍あわせて約8,000の軍勢とともに碎導山城に立て籠もった。この城は武田氏の本城である小浜の後瀬山城を凌ぐ規模を誇ったといわれるが、11,000を数える朝倉・武田連合軍との総力戦となり、激闘の末に敗北、碎導山城



は落城した。

碎導山城を失った昌経は、やがて永禄8年、海岸沿いの古くからの拠点に、高浜城を築いてこれを本城とした。この城は海へ突出する小半島を利用した若狭では初の平山城であり、水軍の運用に欠かせない海城の要素も備えている。現在、城山公園として整備されている一帯が城跡で、西側の最高所が主郭とみられ、高櫓(天守)跡と推定される「天台趾」の平坦な郭が確認でき、当時の名残を伝えている。一帯には、室町幕府三代將軍足利義満も何度か訪れた「明鏡洞」をはじめとする海食洞「八穴の奇勝」があり、風光明媚な景勝地として見どころも多い。

その後、永禄9年の武田義統と子息元明の対立では元明側に加担し、水軍を用いて海上から小浜を攻めるなど主家との合戦を繰り返したが、永禄11

年、武田氏当主の元明が朝倉氏によって保護され越前へ連れ去られると、若狭武田氏による領国支配は事実上終焉を迎えた。

のちに昌経は織田信長と結び、元龜元(1570)年の朝倉攻めや天正3(1575)年の越前一向一揆討伐に水軍を率いて参戦するなど、信長の与力として活躍した。天正9年2月、内裏東において、正親町天皇を迎え織田軍団の大規模な馬揃えが行われた際には、「一番衆」として参加する栄誉を得たが、直後に病死した。後継者に恵まれなかったこともあり、その所領は分割され、若狭の大族であった逸見氏は没落した。

高浜城は昌経の没後、溝口秀勝、堀尾吉晴、山内一豊、浅野幸長など、のちに各地の大名となる武将が代々城主を務めたが、寛永11(1634)年に酒井忠勝が小浜藩主として入部、小浜城を築城したことに伴い、その役目を終えて廃城となった。(文 奥山秀範)



東側の天王山麓の名勝明鏡洞、一帯には浸食でできた複数の海食洞がみられる。



郷土資料館から城山公園に移設された逸見昌経像



△城は二股に分岐する西側の岬「城山」と東側の岬「天王山」を中心に周辺一帯に及んだとされるが、明確な遺構が残っているのは主に城山である。

(写真：国土地理院空中写真)



城山主郭跡の高浜城跡案内板、後の天守に相当する「高櫓」の存在も推測されている。